

姫路市

姫路城城下町跡

-（都）船場川線街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



平成29(2017)年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

姫路城城下町跡

-（都）船場川線街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 29(2017)年 3月

兵庫県教育委員会

例　言

- 1 本書は、姫路市博労町に所在する姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、（都）船場川線街路整備事業に伴うもので、兵庫県中播磨県民センター姫路土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部及び兵庫県立考古博物館を調査機関として実施した。

3 調査の推移

(発掘作業)

確認調査 平成 24 年 1 月 31 日

実施機関：兵庫県教育委員会　兵庫県立考古博物館

本発掘調査 1 (北区)

平成 25 年 8 月 12 日～25 年 9 月 18 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

工事請負：株式会社坪田工務店

本発掘調査 2 (南区)

平成 26 年 8 月 18 日～27 日

実施機関：兵庫県教育委員会　兵庫県立考古博物館

調査協力：株式会社広築（姫路市広畠区）

(出土品整理作業)

平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

- 4 本書の編集は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部山本　誠が行い、同部の非常勤嘱託職員古谷章子・八木和子の協力を得た。また執筆は、兵庫県立考古博物館鐵　英記・岡田章一と山本が担当した。執筆箇所は目次に明記した。

- 5 北区の写真測量は、株式会社ジオテクノ関西に委託した。

- 6 遺物写真撮影にあたっては、株式会社クレアチオと委託契約を交わし、兵庫県立考古博物館において実施した。

- 7 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 8 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 9 発掘調査にあたっては広島大学文学部三浦正幸教授に現地にてご指導頂いた。感謝申し上げます。
- 10 「姫路城の縄張」（図版 2）、「姫路城図屏風」（写真図版 30 上段）の掲載については姫路市立城郭研究室、「大工幾藏姫路城図」（写真図版 30 中段）については姫路市立城内図書館、「姫路城絵巻」（写真図版 30 下段）については関西学院大学図書館からの掲載許可を得ました。感謝申し上げます。

目 次

本文目次

1章 はじめに	
第1節 遺跡を取り巻く環境	山本(1)
第2節 調査に至る経緯と経過	山本(1)
2章 調査の方法	
第1節 確認調査	山本(2)
第2節 北区の本発掘調査	鐵 (2)
第3節 南区の本発掘調査	山本(3)
3章 調査の成果	
第1節 北区の本発掘調査	鐵 (3)
第2節 北区出土の遺物	岡田(4)
第3節 南区の本発掘調査（備前門橋跡）	山本(7)
4章 自然科学分析	
姫路城城下町跡から出土した石垣石の石材同定	藤根 久 株式会社パレオ・ラボ(8)
5章 まとめ	
第1節 北区	鐵 (11)
第2節 南区	山本(11)

表 目 次

表1	姫路城城下町跡の石材とその特徴
表2	各岩石の集計表
表3	遺物観察表

図版目次

図版1	周辺の遺跡（兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』平成23年）
図版2	姫路城の縄張（城と城門の配置） (姫路市立城郭研究室『姫路城絵図集』平成26年（2014）3月より引用)
図版3	発掘調査区位置
図版4	北区 遺構平面
図版5	北区 西壁・南壁土層断面
図版6	北区 東壁土層断面
図版7	北区 石列平面・立面
図版8	北区 出土遺物1
図版9	北区 出土遺物2
図版10	南区 遺構平面
図版11	南区 西壁・南壁土層断面
図版12	南区 「備前門橋」跡平面

写 真 図 版 目 次

写真図版1	調査区全景（南から）	写真図版21	「備前門橋」下部構造（近景 南西から）
写真図版2	調査区全景（北から）		延石4
写真図版3	南北方向石列（東から） 南北方向石列（東から）	写真図版22	延石3 延石2
写真図版4	東西方向石列（北から） 東西方向石列下部（北から）	写真図版23	延石1 礎石1 見切り石（東から）
写真図版5	東西方向石列裏込め状況（西から） 東西方向石列下部（その2：南から）	写真図版24	礎石1（上が南） 延石・礎石・見切り石・石垣（西から）
写真図版6	東西方向石列下部（その2：西から） 調査風景（機械掘削）	写真図版25	延石4・石垣（西から） 石垣（北から）
写真図版7	調査風景（人力掘削） 調査風景（人力掘削）	写真図版26	石垣（上が西） 石垣（西から）
写真図版8	調査風景（遺構掘削） 調査風景（実測）	写真図版27	学識経験者（右：広島大学 三浦教 授）指導（平成26年9月5日）
写真図版9	北区出土遺物1		姫路市立船場小学校6年生遺跡見学 (平成26年9月19日)
写真図版10	北区出土遺物2	写真図版28	現地説明会（平成26年9月20日）
写真図版11	北区出土遺物3		延石の型取り
写真図版12	北区出土磨製石器・鉄器・銭貨	写真図版29	礎石・見切り石の型取り
写真図版13	調査区全景（南から） 調査区全景（北から）		型取り模型の設置（兵庫県中播磨県民 センター 姫路土木事務所設置）
写真図版14	調査区南壁（断面） 調査区西壁（全景）	写真図版30	「姫路城図屏風」（越前市・大谷信一 氏所蔵）
写真図版15	調査区西壁（南側0m付近） 調査区西壁（南側10m付近）		「大工幾藏姫路城図」（姫路市立城内 図書館所蔵）
写真図版16	調査区西壁（南側15m付近） 調査区西壁（南側20m付近）		「姫路城絵巻」（関西学院大学図書館 所蔵）
写真図版17	「備前門橋」下部構造（全景 北から） 「備前門橋」下部構造（全景 北西から）	写真図版31	「天川（あまかわ）橋」移築後看板 (姫路市御国野町 御着城跡内)
写真図版18	「備前門橋」下部構造（全景 西から） 「備前門橋」下部構造（全景 南西から）		「天川橋」高欄・欄干（全景）
写真図版19	「備前門橋」下部構造（全景 南西から） 「備前門橋」下部構造（近景 北から）	写真図版32	「天川橋」高欄・欄干（正面） 「天川橋」高欄・欄干（側面）
写真図版20	「備前門橋」下部構造（近景 西から） 「備前門橋」下部構造（全景 南西から）	写真図版33	「天川橋」敷石下部の延石（全景） 「天川橋」敷石下部の延石（正面）

1章 はじめに

第1節 遺跡を取り巻く環境

姫路城は、1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いの功により池田輝政が姫路城に入城し、1601（慶長6）年から8年間掛け、大改修を実施し広大な城郭（平山城）を築いた。大天守が存在する姫山を中心内堀、中堀、外堀の三重の堀が巡らされ、武家屋敷地、町屋等を囲い込む構造の繩張りが採用された。姫路城域下町跡は姫路城の成立に伴い、漸次形成された城下町である。16世紀中～後期には城の東側から南側に城下町が存在したと考えられている。本調査地が位置する姫路市博労町付近もこの頃に開発されたと考えられる（図版1）。

今回の調査地は大天守から南西約1.1km（直線距離）で、外堀に面した繩張り外に位置する。現存する絵図（写真図版30）等で、備前（岡山）から京都に向う西国街道の城内への入口となる「備前（門）橋」が想定できたが、発掘調査前には、現状でその痕跡を認めることは出来ていなかった（図版2）。

引用・参考文献

2016年 姫路市教育委員会『姫路城城下町跡—姫路城跡第328次発掘調査報告書一』 ほか

第2節 調査に至る経緯と経過

兵庫県中播磨県民センター（姫路土木事務所）は、姫路市博労町においてJR姫路駅西側を南北に通る都市計画道路船場川線（県道姫路港線）の改良事業を計画したが、同事業の予定地の一部は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町（兵庫県遺跡地図番号：020169）に該当することから平成23年度に、兵庫県教育委員会が確認調査（図版3の1区～7区）を実施した。その結果、姫路城城下町に係わる遺構の存在が明らかになり、改めて本発掘調査を実施することになった（図版3の北区・南区）。

平成23年度確認調査（遺跡調査番号 2011318）

調査期間 平成24年1月31日

調査担当 兵庫県教育委員会 兵庫県立考古博物館

総務部 埋蔵文化財課 企画調整課 平田博幸

平成25年度には事業予定地内の本発掘調査対象範囲の北部（以下「北区」と呼ぶ）を、平成25年4月19日付け中播（姫土）第1083号による兵庫県中播磨県民局長からの依頼に基づき本発掘調査を実施し、平成26年度には南部（以下「南区」と呼ぶ）を平成26年7月28日付け中播（姫土）第1452-3号の依頼に基づき本発掘調査を実施した。

北区：平成25年度本発掘調査（遺跡調査番号 2013008）

調査期間 平成25年8月12日～25年9月18日

調査担当 公益財團法人 兵庫県まちづくり技術センター

埋蔵文化財調査部 調査第1課 鐘 英記 田村唯史

調査面積 194m²

南区：平成 26 年度本発掘調査（遺跡調査番号 2014071）

調査期間 平成 26 年 8 月 18 日～27 日

調査担当 兵庫県教育委員会 兵庫県立考古博物館

総務部 埋蔵文化財課 山本 誠

調査面積 150 m²

平成 27 年度・28 年度出土品整理作業

作業期間 平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

実施機関 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理担当 山本 誠・山田清朝・永恵裕和（公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター）

鐵 英記・岡田章一（兵庫県立考古博物館）

2 章 調査の方法

第 1 節 確認調査

事業予定地内に 7箇所の確認調査区を設定した（図版 3）。1 区は 2 × 1 m、2～7 区は 2 × 2 m とし、機械および人力掘削を併用して、遺構・遺物の検出に努めるとともに土層の堆積状況を確認した。

3 区および 4 区では、地表から厚さ約 1 m の盛土（瓦礫主体）の下位で南北方向に並ぶ石垣状の石列や延石を検出した。武家屋敷跡または城下町跡を区画する遺構に類似するなど、旧船場川の護岸の一部と判断した。また石列付近から近世陶磁器が出土した。

なお、1・2・5～7 区では明確な遺構を検出することは出来なかったので、本発掘調査の対象範囲は 3 区および 4 区周辺に限定することとなった。

事業実施工程の関係上、本発掘調査は 2 ケ年に分割して実施することとなった。

第 2 節 北区の本発掘調査

事業予定地内に調査区を設定し、確認調査の結果などから遺構面の上層までを機械により掘削し、その下は人力掘削によって遺構・遺物を確認しながら調査を行った。全体測量については、ポール写真測量を実施した。

遺構検出後、個別遺構については写真撮影・図面作成を行い、調査地が市街地に位置し、狭小であることから全体測量はポール写真測量により 1 / 50 縮尺の原図を作成した（図版 4 は 1 / 100 縮尺）。調査区の東西において土層の堆積状況が著しく異なっており、西端では江戸時代の遺構面とおもわれる面が良好に残存するのに対し、東側では後世の攪乱により近世以前の土層においてかなり改変がみられた。そのため東西、および南壁の土層断面図を作成し、土層の把握に努めた。

第3節 南区の本発掘調査

北区と同様に遺構面上層まで機械により掘削した後、人力にて遺構面精査および床面整形を実施した。なお、平面測量については株式会社神戸清光、株式会社 CUBIC の協力により遺構実測支援システム（「遺構くん」）にて作成することができた（図版 10）。

3 章 調査の成果

第1節 北区の本発掘調査

① 層位（図版 5・6 写真図版 1・2）

調査区内では戦争復興のために廃棄されたとみられる瓦礫が層を形成していた。また近代以降の擾乱が調査区の大部分におよび、近世の整地層は部分的な分布にとどまる。調査区の西側が比較的良好に残存していたため西側を基準とし、現場順序として第1層から第8層まで細分した。

第1層：焼土を含む近現代の客土で層厚は 10～20 cm である。この焼土は第2層に由来し、戦災時のものと考えられる。

第2層：焼土と瓦礫の層で調査区全体にみられる。層厚は約 100 cm で部分的には 150 cm 以上に及ぶ。

第3層：褐色の中粒砂層で近世の整地層と考えられ、部分的にアスファルトの舗装が残存している。

第4層：灰褐色のシルト質細粒砂層である。層厚は 10～20 cm で調査区中央部に分布する、近代以降の整地の 1 単位と考えられる。

第5層：褐色の礫混じり中～細粒砂層である。層幅は 20～50 cm で調査区を東西に貫通する土管の埋土であり、近代の造成とみられる。

第6層：にぶい黄褐色の練を多く含む粗粒砂層である。

第7層：にぶい黄褐色のシルト質細粒砂層である。上面には幅 30～50 cm の扁平な石が設置されており、これらの造成に伴う整地層と考えられる。

第8層：黄褐色の中粒砂のブロックを多く含む暗黃灰色の中～細粒砂層で近世の整地層とみられる。調査区の中央付近では部分的に暗色化した層との互層が確認され、複数回の整地を確認した。

第8層は調査区の西側では良好に残存するが、中央では部分的な残存にとどまり、東半では後世の擾乱によりほとんど認められない。層中からは寛永通宝とみられる古銭や 18～19 世紀の陶器、磁器が出土している。調査区中央南よりにおいて SX01 を検出した。第9層は明黄褐色の中～粗砂混りの細粒砂層で越流堆積とみられる自然堆積層と考えられ、層中において遺物はほとんど認められない。第10層は暗黃灰色の中～細粒砂層で、部分的に黄褐色の中粒砂を含む。船場川に面する自然堆積層で遺物の混入はほとんどみられない。

② 石列（図版 7 写真図版 3～6）

調査区の南側において東西方向石列とそれに直行する南北方向石列を検出した。

第8層およびその下位層の堆積状況は調査区の西側から東側の船場川に向けて緩やかに下る斜面であり、それらの自然堆積層を整地するように第7層が分布する。その第7層より掘り込む形で東西方向石列が

あり、東西方向石列と直行するかたちで第7層上面に南北方向石列が並ぶ。東西方向石列は現地表下約220cmから3段～4段あり、それより上部は近代以降の積替えとみられ、近代以降の石列は表土直下までみられる。東西方向石垣の積替え以前の石垣には粗石～巨石の栗石が30～50cmの範囲に点在して残る。東西方向の石垣の上段では近代以降の石の積替えを確認した。積替えられた石列には栗石は存在しなかった。これらの石列は南北方向の石列と交わるよう並び、以西には並ばない。

南北方向石列は西から緩やかに上がる斜面の頂点に盛土（第7層）を行い、設置されていた。石列は上下2段が残存し、東西方向石列と交わり、2石分北へ延びる。南北方向石列は西側の船場川の方を向いており、石列の裏面から古銭（寛永通宝）が出土している。

第2節 北区出土の遺物

(表3 図版8・9 写真図版9～12)

1は土師器皿である。回転台を使用して成形し、内面から体部外面にかけて回転ナデ調整を施す。底部外面は未調整で糸切痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。

2は無釉陶器の香炉である。口縁部は断面台形に肥厚する。体部外面にヘラ描きで「泉口」の文字が施される。色調は浅黄橙色を呈する。3は無釉陶器插鉢である。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり口縁部は断面台形状に肥厚する。口縁部外面には凹線が2条巡る。体部内面に10条1単位の攝目が施される。色調は赤褐色を呈し焼成は堅緻である。18世紀後半の明石焼插鉢である。4も無釉陶器插鉢である。平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。体部内面に11条1単位の、底部内面には9条1単位の攝目がそれぞれ施される。体部外面下方に「久喜」の刻印が見られる。色調は赤褐色を呈し焼成は堅緻である。18世紀後半の明石焼插鉢である。

5は施釉陶器碗である。断面台形状の輪高台をもつ。体部は底部との界で大きく屈曲し、体部は外反気味にほぼ直上に延びる。器壁は非常に薄い。内外面とも白濁釉を全面に施釉し、鉄絵で施文する。外面の高台脛以下は露胎である。産地は特定できないものの、19世紀前半代の京焼系陶器と考えられる。

6は土師器擂台である。平底で棒状の脚部が貼りつくが皿部は欠損している。底部外面は未調整で糸切痕が残る。

7は施釉陶器ひょうそくである。平底で短い脚部が付く。体部は大きく内湾し口縁端部は尖り気味に收める。体部内面には灯心立てを貼り付ける。内外面とも灰釉を施釉し、にぶい黄褐色を呈する。19世紀前半代の瀬戸・美濃系陶器と考えられる。

8は施釉陶器鉢である。断面台形状の低い高台をもち、体部はやや外反気味に外上方に延び、口縁部は緩やかに外方にひらく。内外面とも鉄釉、緑釉で丸文、格子状文を施文し、透明釉を施釉する。色調は黄色味を帯びた淡灰色を呈する。19世紀前半代の復興織部と考えられる。

9は白磁紅皿である。型作り成形で外面は菊花状に整形する。内面は透明釉を施釉して白色を呈する。外面は露胎である。19世紀前半の肥前系白磁である。

10は白磁小碗である。断面台形状の高台をもち、底部の器壁は厚い。体部は直線的にはぼ直上に延び、口縁端部は尖り気味に收める。底部内面に文字をスタンプする。内外面とも透明釉を施釉し白色に発色する。口縁端部に鉄釉を施す。19世紀前半以降の瀬戸・美濃系白磁である。

11は青磁盤である。断面台形状の低い高台を削り出す。内面は草花文を浅く施文する。内面から外面

の高台裏まで青磁釉を施釉し底部外面は蛇の目状凹形高台に成形し、蛇の目の部分に鉄釉を施釉している。龍泉窯系青磁を模倣した近世の肥前系青磁と考えられる。

12は青磁鉢である。型作り成形で体部は葉状に成形し内面には細かい葉脈を型押しで施文する。内外面とも青磁釉を施釉し淡暗緑色に発色する。19世紀前半代の三田青磁の優品である。

13は染付磁器の香合もしくは小型の段重の蓋である。隅切りの方形を呈し、中央に球形のつまみを持ち呉須で放射状に草花文を施文する。産地は特定出来ないものの、19世紀前半以降の京焼系の製品と考えられる。

14はクローム青磁の皿である。高台裏以外に青磁釉を施釉し淡黄緑色を呈する。底部外面は透明釉を施し白色を呈する。底部内面に円形の花文を赤絵、金欄手などで上絵付するが大部分がすでに剥落している。近代以降の製品である。

15は染付磁器小碗である。断面台形状の高台をもち底部の器壁は比較的厚い。体部は内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。体部外面に淡い呉須で簡略化された草花文を描く。18世紀後半代の波佐見産の粗製の染付磁器である。

16は染付磁器小碗（猪口）である。底部の器壁は厚く、体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収め、わずかに外方にひらく。体部外面全面に漢詩文を施文する。19世紀前半代の肥前系染付磁器である。

17は染付磁器碗である。断面台形状の比較的低い高台を持ち、体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁部はわずかに外方にひらく。口縁部内面に太い界線が1条巡る。体部外面に肥前風の細かい草花文を施文する。19世紀前半代の瀬戸・美濃系染付磁器である。

18は染付磁器碗である。断面台形状の高台をもち、体部は外反気味に外上方に延びる。口縁部はわずかに外方にひらく。口縁部内面に太い界線が1条巡る。外面に蝶と草花文を施文する。19世紀前半代の瀬戸・美濃系染付磁器端反碗である。

19は染付磁器碗である。細く高い高台を持ち、体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。外面には淡い呉須で松文を施文する。19世紀前半代の肥前系染付磁器広東碗である。

20は染付磁器碗である。細く低い高台をもち、底部の器壁は比較的厚い。底部と体部の界は不明瞭で体部は内湾気味にほぼ直上に延びる。体部外面には竹文を、底部内面にはくずれた五弁花文をスタンプする。19世紀前半の肥前系半球形碗である。

21は施釉陶器碗である。体部は内湾気味にほぼ直上に延び、口縁端部は丸みを持つ。体部外面上面に鉄絵で草花文（松葉？）を施文する。19世紀前半以降の京焼系陶器（丹波焼？）と考えられる。

22は染付磁器杯である。平底で体部は直立し口縁端部は丸みをもつ。体部外面に銅板転写で海戦と陸戦の模様（日清戦争か？）を施文する。また、半截になった後、水金で接合され、その際に底部外面に朱書きで文字が書かれている。明治時代の製品であろう。

23は瑠璃釉の筒形碗である。平底で底部の器壁は非常に厚く、体部は直線的に直上に延びる。外面は呉須を全面に塗布するいわゆる瑠璃釉碗である。幕末から明治期の製品である。

24は染付磁器皿である。断面三角形状の低い高台を持つ。底部と体部の界は不明瞭で体部は内湾気味に緩やかに外上方に延びる。底部外面には針支え痕が1カ所認められる。内面は呉須で草花文などを描く。18世紀代の肥前系染付磁器と考えられる。

25は染付磁器皿である。高台は断面三角形の蛇の目凹形高台である。体部は内湾気味に外上方に延び、

口縁端部は丸みをもつ。口縁部は輪花状に整形する。内面に線描きの菊花文、草花文などを描く。19世紀前半代の肥前系染付磁器である。

26は染付磁器皿である。底部は蛇の目凹形高台を呈し底部の器壁は非常に厚い。平底で体部は内湾気味に外上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内面に格子状文を施文し底部内面は蛇の目状に釉ハギする。19世紀前半代の波佐見産の粗製の染付磁器である。

27は染付青磁の碗蓋である。全体に器壁は厚い。外面に薄い青磁釉を施釉しオリーブ灰色に発色する。内面は呉須で草花文を描き、内面中央にコンニャク印判で壊れた五弁花文を施文する。18世紀代の肥前系染付青磁である。

28は土製品で城形である。片型で裏面は扁平である。顔料が残存しており緑色、白色の色が観察される。内面には指頭圧痕が残る。19世紀前半代のいわゆる伏見人形で箱庭道具であろう。

29は不明土製品である。外面はナデ調整が施される。土製品の部分の可能性が高いが、本体が何かは不明である。

30は碁石である。31は土管で、長さ66.3cm、口径13.0cm(広)及び10.1cm(狭)、内径は8.0~8.5cmである。

32・33は軒丸瓦である。

S1は粘板岩製の砥石、S2も砂岩製の砥石である。いずれも表裏両面の他側面にも使用の痕跡が残されている。

M1・2は鉄製の釘で、M3~6はすべて銅銭で、寛永通宝である。

第3節 南区の本発掘調査（備前門橋跡）

① 遺構（図版10　写真図版13）

延石（4本）、礎石（2個）のほか、見切り石、石垣等を検出した。これらの遺構に伴う明確な出土遺物は存在しないが、出土状況から江戸時代に属するものとした。その他土坑を数十基検出したが、出土品の検討から近現代に属するものと判断した。

② 延石（図版12　写真図版17～25）

延石は4本検出した。長さは125～140cm、幅・厚さともすべて30cmである。すべて凝灰岩であり、兵庫県高砂市周辺で産出する「竜山石」と推定できる。

	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質
延石1	130	30	30	凝灰岩（竜山石）
延石2	125	30	30	凝灰岩（竜山石）
延石3	140	30	30	凝灰岩（竜山石）
延石4	125	30	30	凝灰岩（竜山石）

③ 礎石（図版12　写真図版23・24）

礎石1は長さ50cm、幅45cm、厚さ20cm以上の凝灰岩（竜山石）である。中央に15cm四方の「ほぞ穴（深さ約4cm）」がある。さらに「ほぞ穴」周囲に約35cm四方のかすかな「変色範囲」が確認できた。このことから35cm四方の角柱（高欄）を支える礎石であるとした。礎石2は長さ45cm、幅40cmで欄干の柱を受ける役割を持つと判断した。

4 章 自然科学分析

姫路城城下町跡から出土した石垣石の石材同定

藤根 久 (株式会社パレオ・ラボ)

1.はじめに

姫路城城下町跡は、姫路市博労町地内に所在する。ここでは、姫路城城下町跡の調査において検出された石垣石について、肉眼観察による石材同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、姫路城城下町跡から出土した石垣石 5 点である（表 1）。

石材同定は、主に肉眼と実体顕微鏡観察により行い、実体顕微鏡を用いてすべての石材表面の写真撮影した。

表 1 姫路城城下町跡の石材とその特徴

番号	造構	器種	出土年月日	色 調	組織の特徴	石 材
1	石 3	石垣	2013.9	灰色 (5Y 4/1)	細粒質、石英	硬質細粒砂岩
2	石 4	石垣	2013.9.9	灰白色 (5Y 7/2)	軽石質、長石類・緑色岩片	軽石質凝灰岩
3	石 19	石垣	2013.9.9	灰白色 (5Y 8/1)～に似る赤褐色 (5YR 5/4)	斑晶質、長石類・石英・輝石類	流紋岩
4	石 27	石垣		灰色 (N 6/～4/)	細粒質、黄銅鉱脈	硬質細粒砂岩
5	石 31	石垣	2013.9.10	灰白色 (5Y 7/2)	軽石質、長石類・緑色岩片	軽石質凝灰岩

3. 結果

表 1 に、肉眼による石材同定の結果を示す。

以下に、岩石の特徴について記載した。記載は、岩石表面における色調や構成鉱物、岩石組織の特徴等について行った。また、石材の写真を写真 1～3 に示した。

1) 細粒砂岩（写真 1、分析 No.1）

細粒粒子の石英などで構成される黒色の硬質岩石である。

2) 軽石質凝灰岩（写真 2、分析 No.2）

石英、長石類、緑色岩片からなる軽石質岩石である。

3) 流紋岩（写真 3、分析 No.3）

石英や長石類、輝石類の斑晶鉱物からなる斑晶質岩石である。

表 2 各岩石の集計表

大分類	中分類	分類群	数量
堆積岩類	碎屑岩	硬質細粒砂岩	2
火成岩類	火山碎屑岩	軽石質凝灰岩	2
	火山岩	流紋岩	1
総 計			5

なお、遺跡周辺には、中世代白亜紀～古第三紀相生層群の流紋岩～デイサイト火山碎屑岩及び砂岩（地質図の凡例 Ar）、礫岩・砂岩・泥岩および凝灰岩（地質図の凡例 As）、広峯層群の流紋岩火碎岩類（地質図の凡例 Hm）などが分布する。

引用文献

猪木幸夫（1981）20万分の1地質図幅「姫路」、地質調査所。

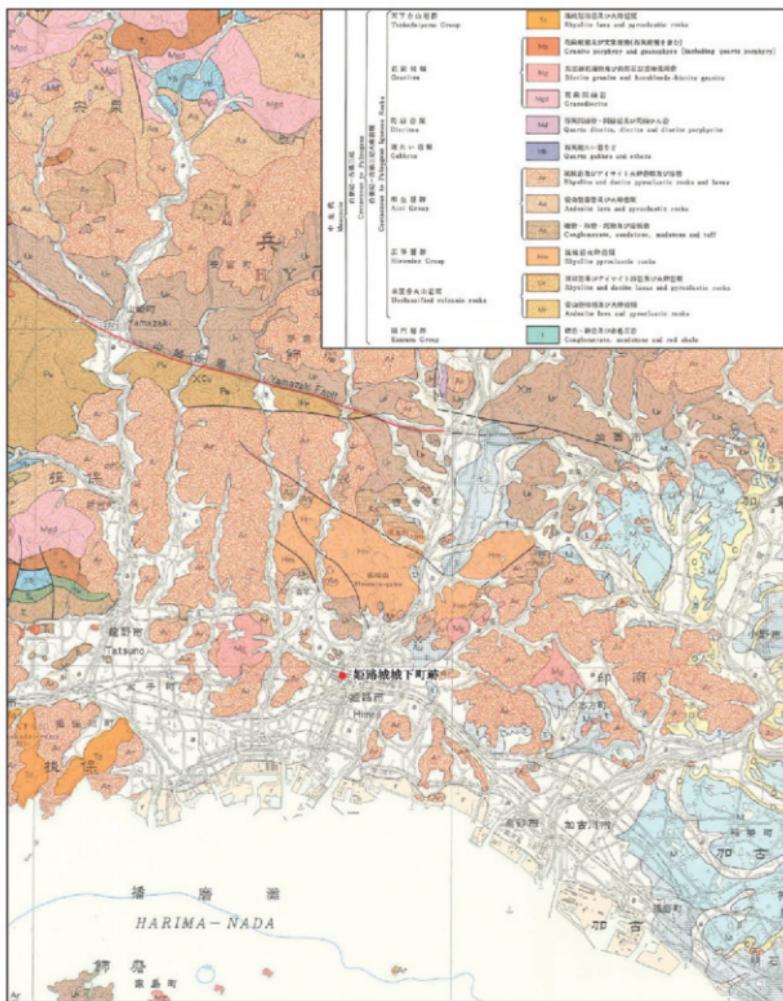




写真 岩石の実体顕微鏡写真（スケール bar:1mm）

1. 硬質砂岩（分析 No.1）
2. 軽石質凝灰岩（分析 No.2）
3. 流紋岩（分析 No.3）

5章　まとめ

第1節　北区

今回の調査は姫路城城下町跡の船場川沿いにあたる。姫路城城下町跡はこれまで姫路市教育委員会による調査が300次あまり実施されているが、博労町付近では初めての本発掘調査となった。調査の結果、船場川と並行する石列と、直行する石列、建物跡の西端とみられる柱穴群、不明土坑（SX01）などが検出された。これらの存在から、調査区からさらに西に姫路城城下町の関連遺構が広がることが明らかになつた。

第2節　南区

発掘調査の結果、江戸時代に作成された様々な絵図に描かれていた備前門橋として船場川に架かっていた木橋の構造（一部）を検出した。このことにより、絵図で示されていた備前門（橋）の位置が特定できたほか、外堀の外側で姫路城に関する構造物を初めて発見した。

現地指導を受けた広島大学の三浦正幸教授（工学博士）により以下のように評価を受けた。

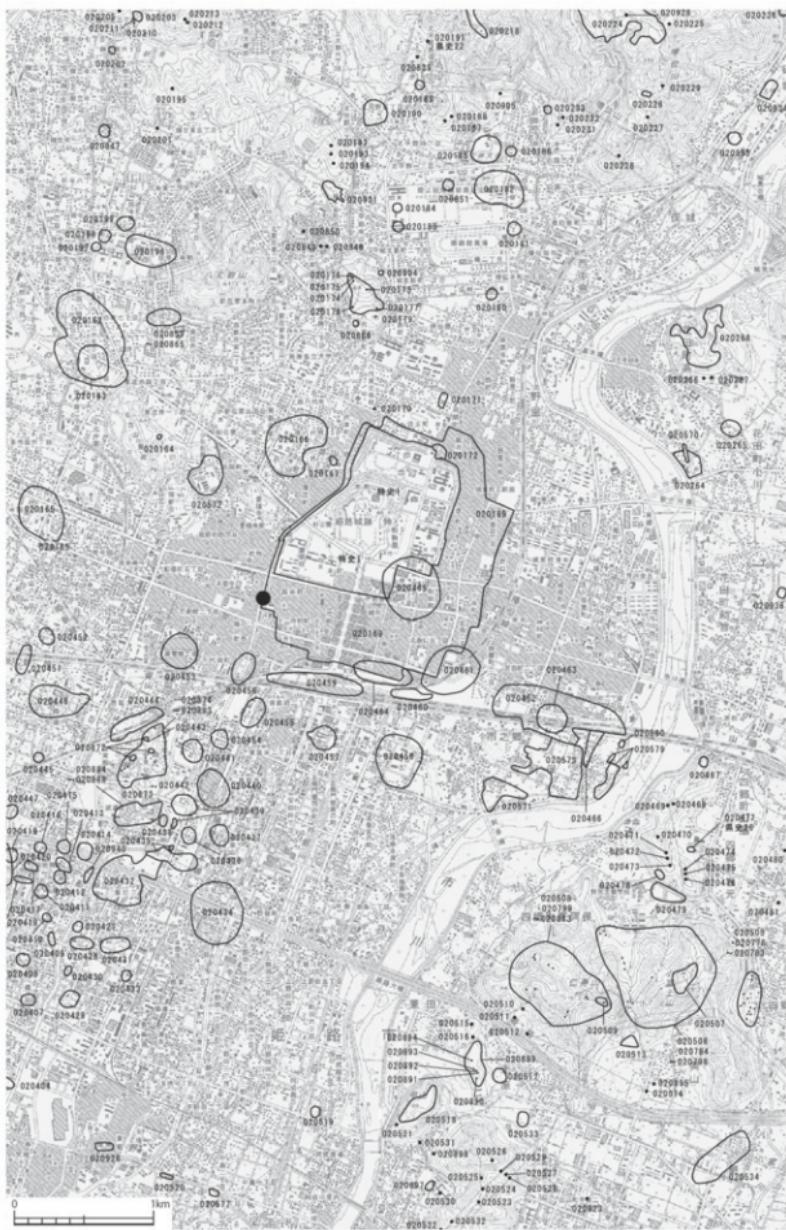
- 1 江戸時代の備前門に架かっていた木橋の一部に間違いない。
- 2 市街地において江戸時代に架かっていた木橋の構造が残っている例は全国的にきわめて珍しい。
- 3 木橋は推定幅約3間（5.4m）以上であり、西国街道が通る立派な木橋であったと推定できる。
- 4 15cm×15cmの穴のあいた礎石は、高欄（欄干）の親柱が建てられていたもの（控柱）の1つ。また、礎石に残っていた痕跡から、角柱の可能性が高い。角柱であるので、擬宝珠はなかったことが分かる。
- 5 この礎石の北側に並ぶ石は路面の「見切り」で、使用当時は表面だけを残して埋まっていたと思われる。
- 6 長さ120～140cmの4本の直方体の石は、橋台の一部を構成するもので、橋桁を留めるほか、橋面敷板がこの上まで延びていた。（高欄本体の親柱は、敷板に取り付けられていた。）

なお、姫路市御国野町所在の御着城跡敷地内に移築保存されている「天川橋（あまかわばし）」は石製であるが、木製であった「備前門橋」の構造を連想することができる参考として掲載した（写真図版31～33）。

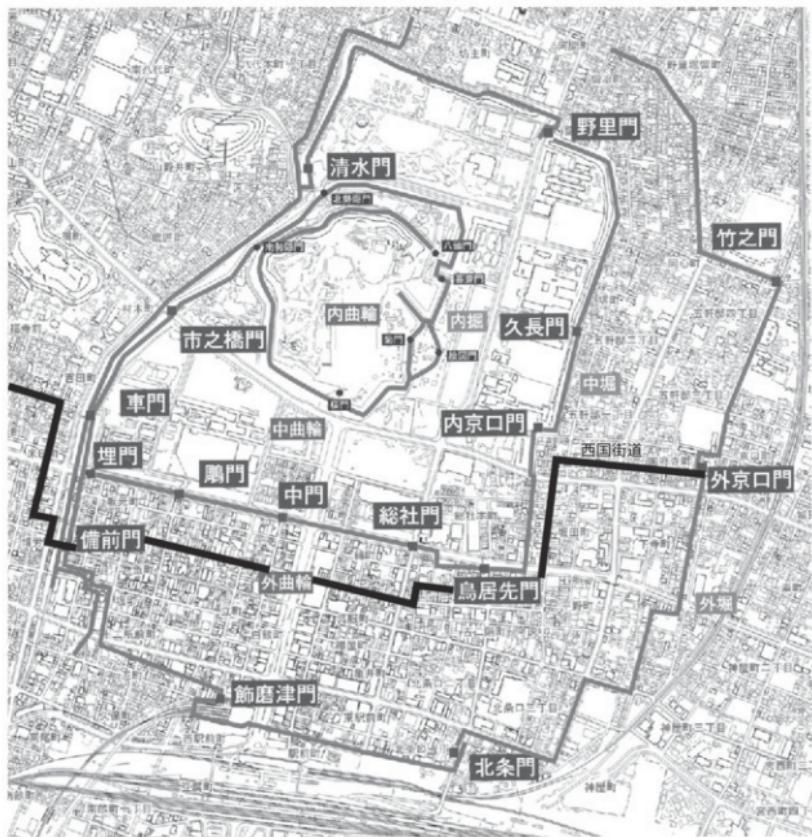
表3 遺物観察表

報告番号	種別	器種	法量(cm)					重量(g)	備考
			口径	器高	底径	長さ	幅		
1	土師器	小皿	6.9	1.55	5.0				
2	無釉陶器	香炉	(16.5)	(3.45)					
3	無釉陶器(明石)	搖鉢	(36.6)	(12.05)					明石産 18c 後半
4	無釉陶器(明石)	搖鉢		(7.5)	(16.25)				「久喜」 18c 後半
5	施釉陶器	碗	(10.5)	5.4	(4.45)				京焼系 19c 前半
6	土師器	獨立		(3.6)	5.2				
7	施釉陶器	ひょうそく	(4.9)	5.35	4.4				瀬戸・美濃 19c 前半
8	施釉陶器	鉢	(18.1)	6.9	6.0				復興織部 19c 前半
9	白磁	紅皿	4.6	1.45	1.45				肥前系 19c 前半
10	白磁	小碗	7.0	4.9	3.25				瀬戸・美濃系 19c 前半以降
11	青磁	盤	(2.5)	(16.95)					肥前系 近世
12	三田青磁	鉢	(5.6)						19c 前半代
13	染付磁器	(香合) 蓋	4.2	2.5					京焼系 19c 前半以降
14	染付青磁	皿	12.0	2.4	7.3				クローム青磁 20c
15	染付磁器	小碗	6.4	3.0	2.6				肥前系波佐見 18c 後半代
16	染付磁器	小碗(猪口)	(6.65)	4.3	(3.0)				肥前系 19c 前半代
17	染付磁器	碗	(8.25)	4.5	3.3				瀬戸・美濃系 19c 前半代
18	染付磁器	碗	(7.75)	3.85	(2.9)				瀬戸・美濃系堆反碗 19c 前半
19	染付磁器	碗	(9.45)	5.7	(4.65)				肥前系波東焼 19c 前半
20	染付磁器	碗	(8.2)	5.25	3.8				肥前系半球形碗 19c 前半
21	施釉陶器(丹波?)	碗	(9.9)	(4.9)					京焼系 19c 前半以降
22	染付磁器	杯	4.8	5.7	3.15				燒窯 明治
23	磁器	碗	(7.1)	6.35	(3.75)				彌曉軒模型碗 19c 代
24	染付磁器	皿	(17.8)	3.35	(9.85)				肥前系 18c 代
25	染付磁器	皿	(13.1)	2.5	(7.2)				肥前系 19c 前半代
26	染付磁器	皿	(12.4)	3.5	7.75				波佐見 19c 前半
27	染付青磁	蓋	(9.3)	3.1	4.0				肥前系くらわんか手 18c 後半
28	土製品	城(型打ち)			(3.95)	2.4	1.3		伏見人形 19c 前半
29	土製品	不明品				1.55	1.6	1.4	
30	石製品	碁石(黒)			2.2	2.2	0.45	3.7	
31	無釉陶器	土管	13.0		10.1	66.3	筒内様 8~8.5		
32	瓦	軒丸瓦		(12.2)		胴(5.6)	13.0		
33	瓦	軒丸瓦		14.0			14.0		
報告番号	種別	器種	法量(cm)					重量(g)	備考
			口径	器高	底径	長さ	幅		
S1	石製品	砥石(粘板岩)				(10.1)	5.8	0.85	101.3
S2	石製品	砥石(砂岩)				(5.6)	3.95	2.75	6.82
報告番号	種別	器種	法量(cm)					重量(g)	備考
			口径	器高	底径	長さ	幅		
M1	鉄器	釘				5.85	0.5	0.5	3.0
M2	鉄器	釘				(2.65)	0.45	0.6	0.8
M3	銅鏡	寛永通宝				2.19	2.22	0.12	2.5
M4	銅鏡	寛永通宝				2.29	2.29	0.08	2.1
M5	銅鏡	寛永通宝				2.29	2.28	0.12	2.8
M6	銅鏡	寛永通宝				(1.92)	(1.90)	0.11	1.3
M7	銅鏡	寛永通宝				2.50	2.52	0.13	3.2

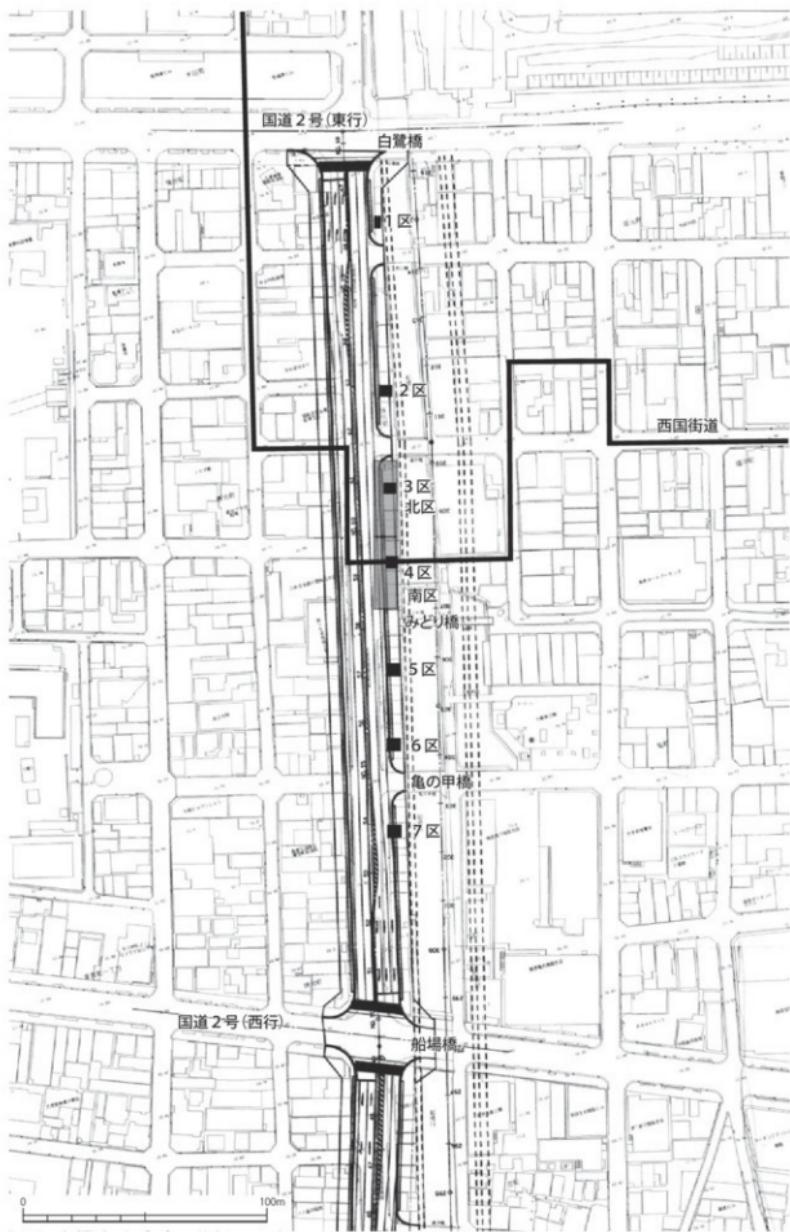
図 版



周辺の遺跡（兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』平成 23 年）

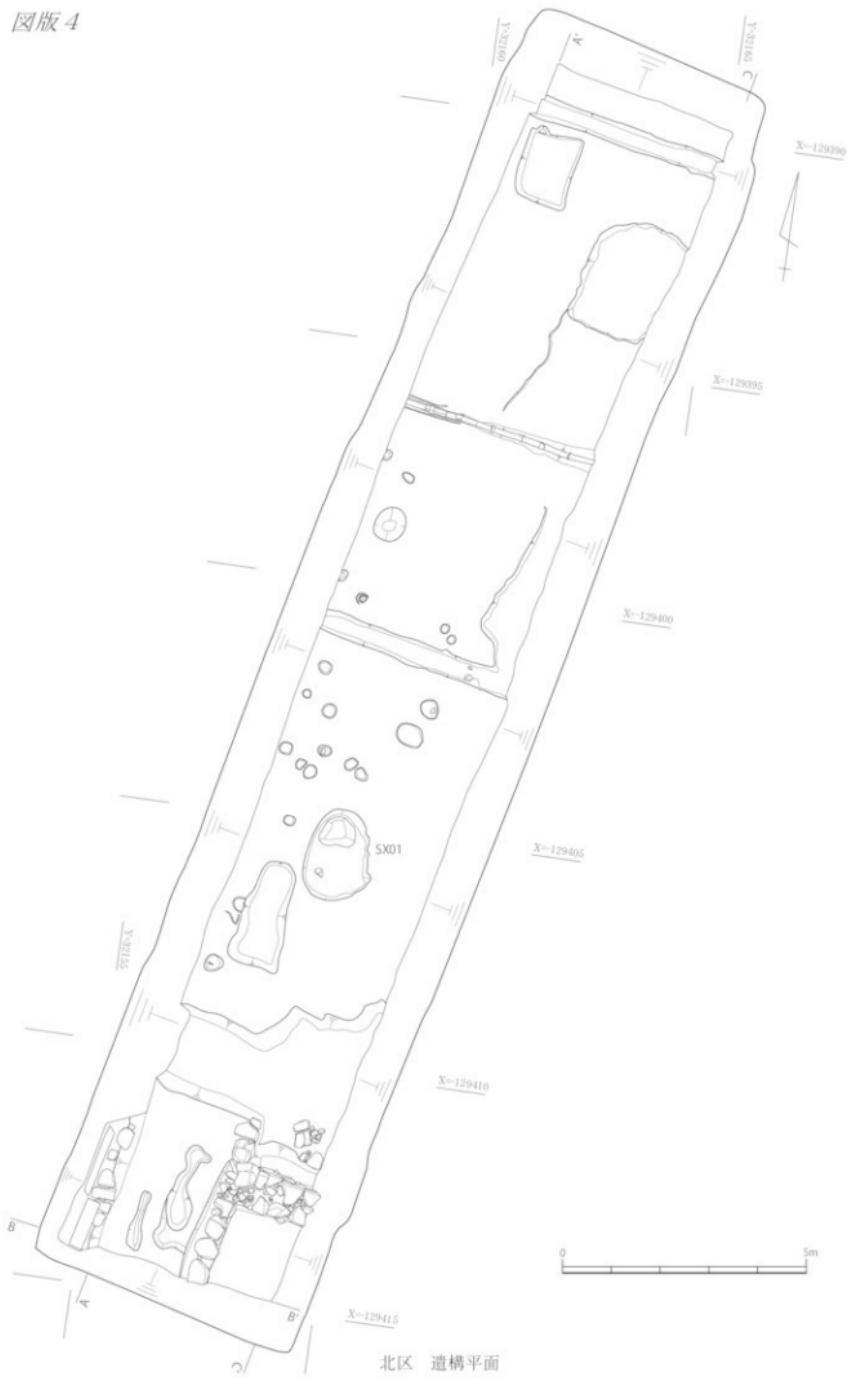


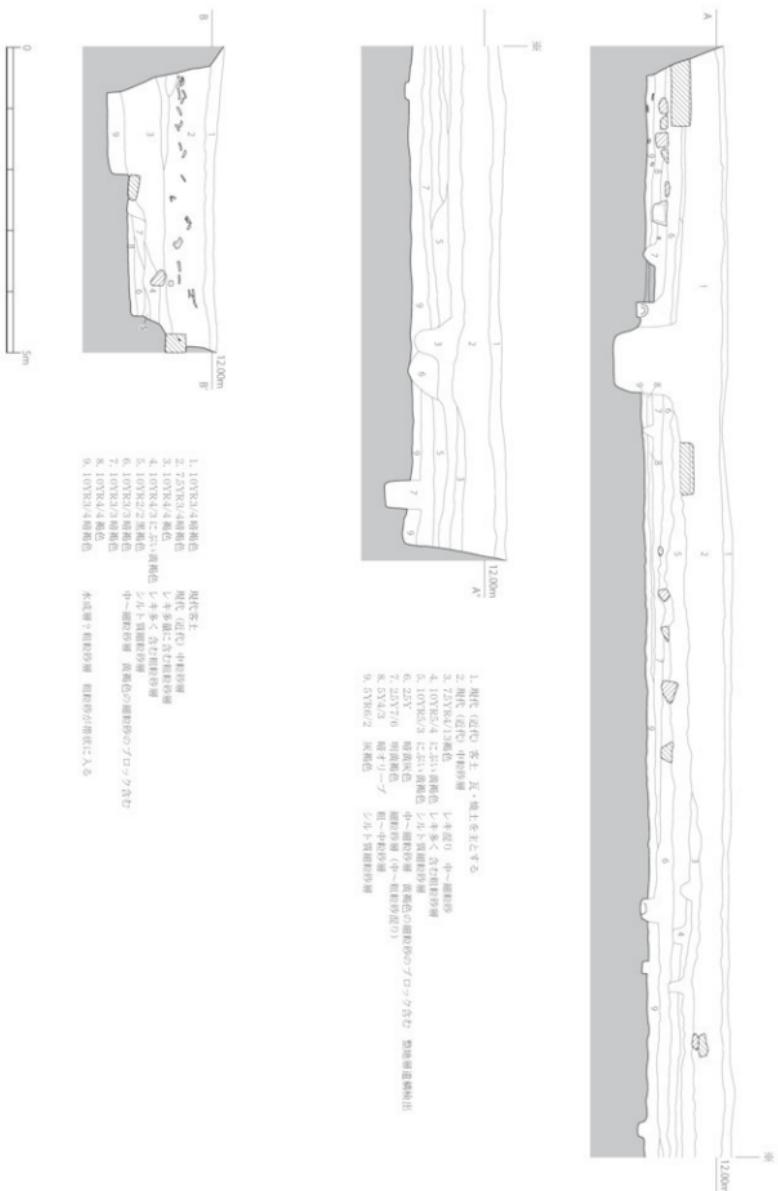
姫路城の縄張（城と城門の配置）
(姫路市立城郭研究室『姫路城絵図集』平成 26 年 (2014) 3 月より引用)

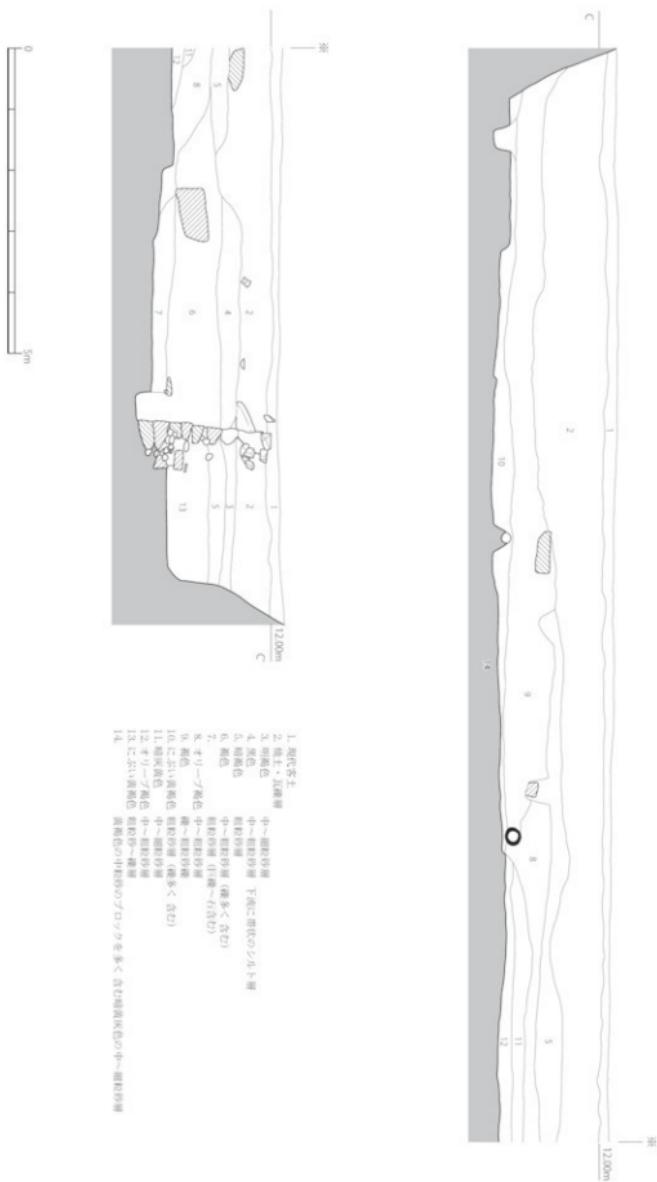


発掘調査区位置

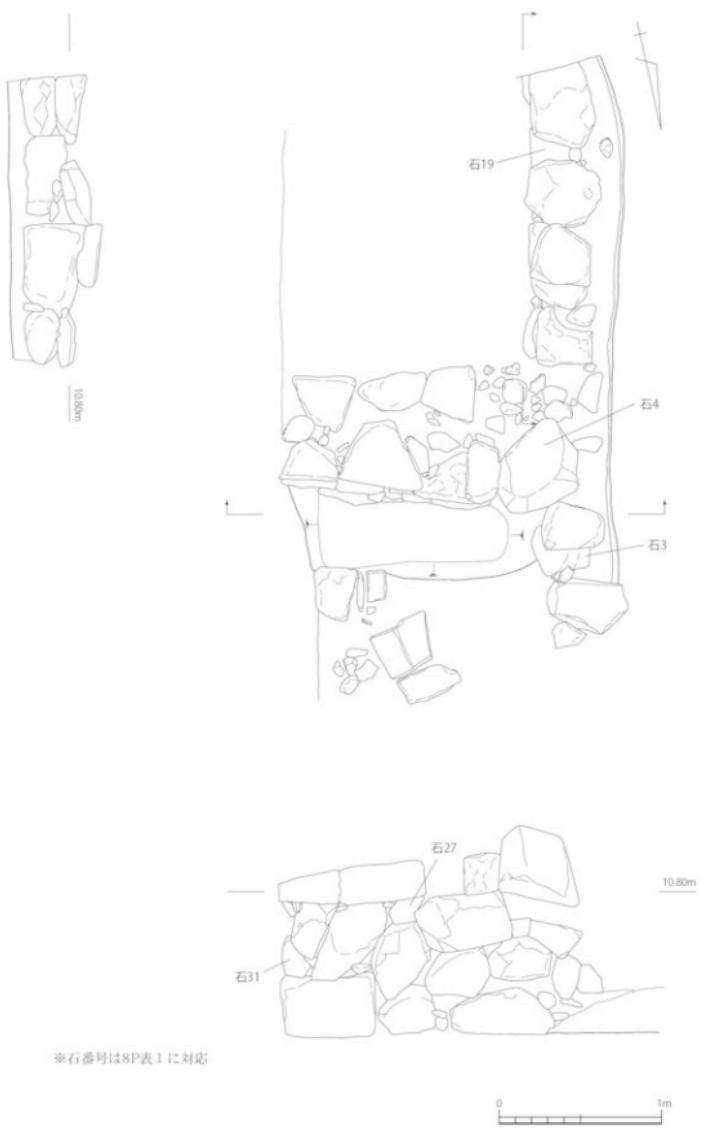
図版 4



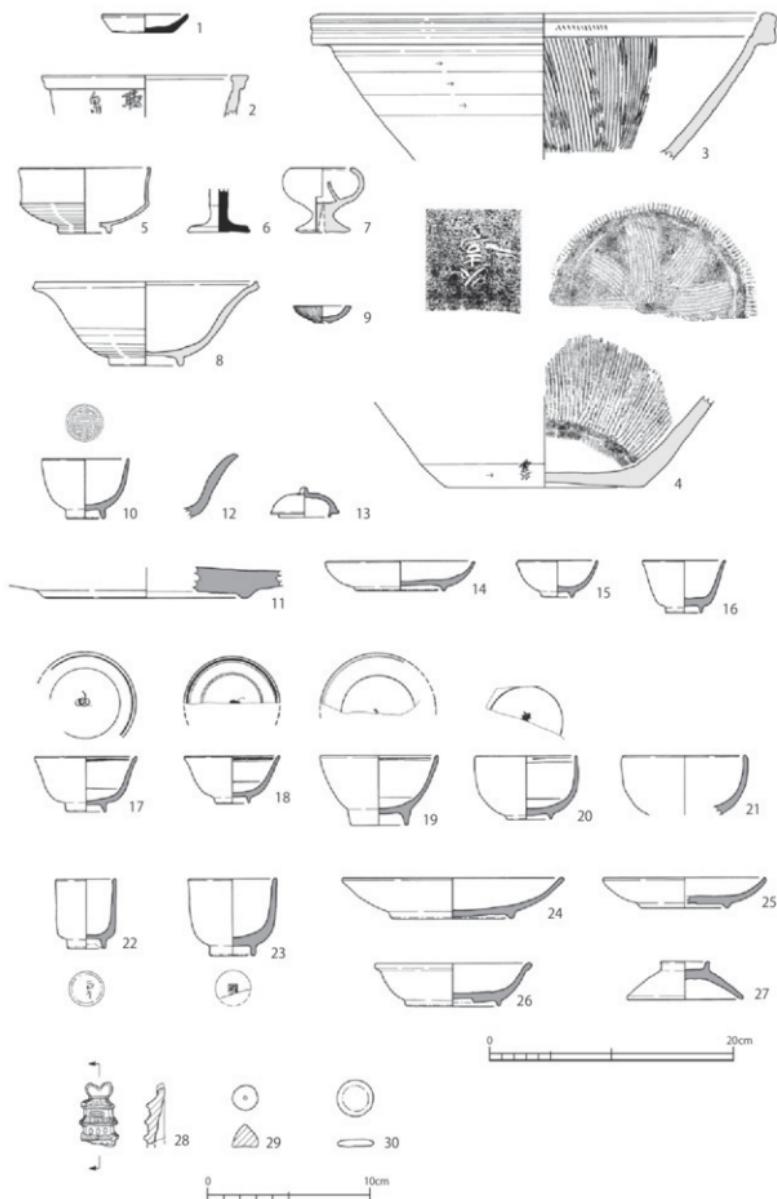




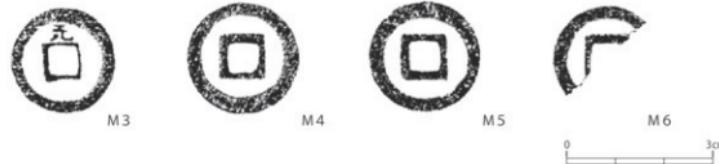
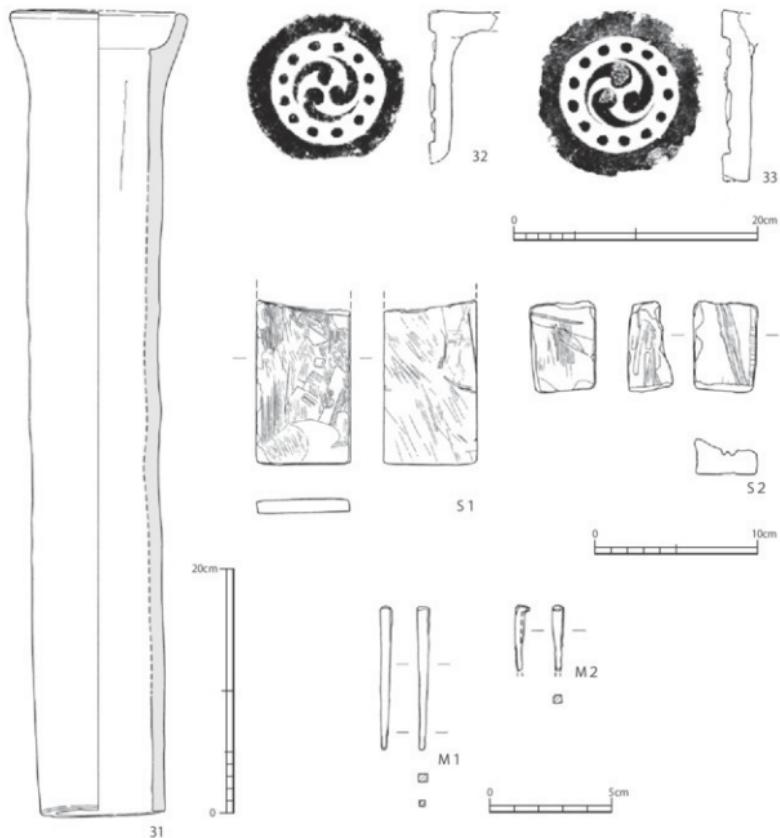
北区 東壁土層断面



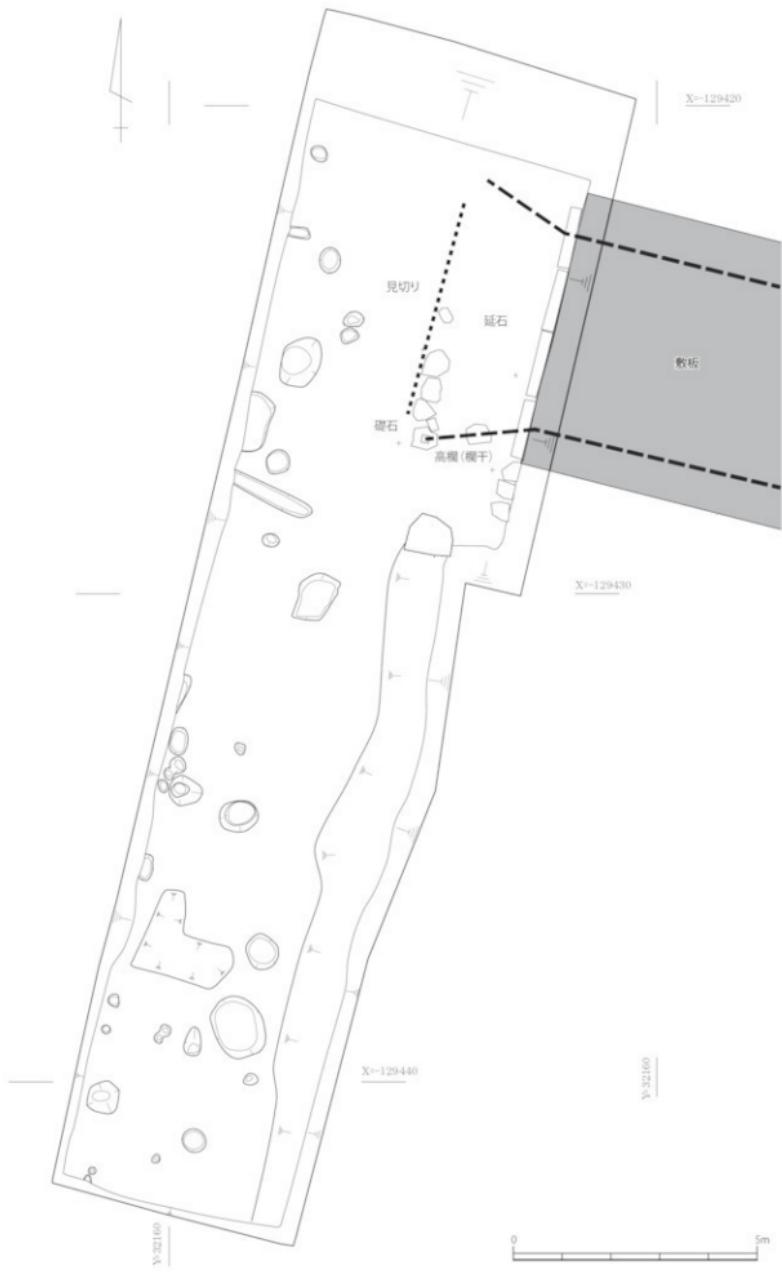
北区 石列平面・立面



北区 出土遺跡 1



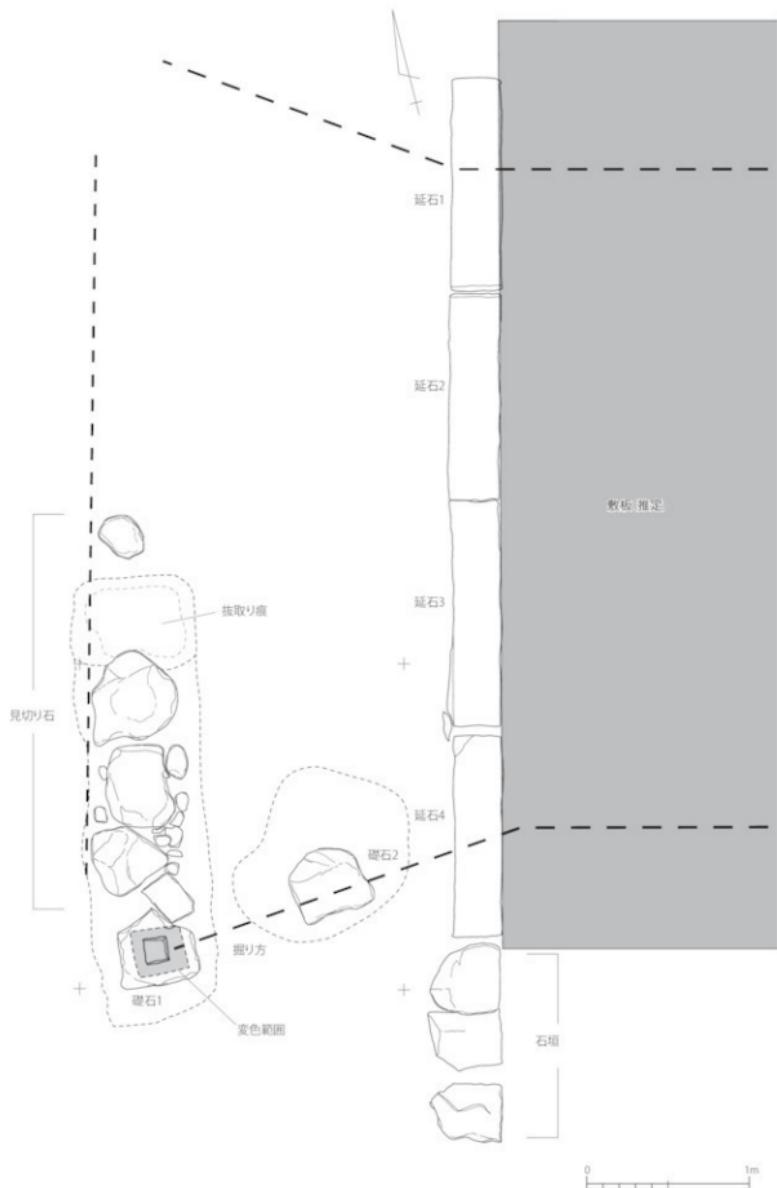
北区 出土遺跡 2



南区 遺構平面



南区 西壁·南壁土层断面



南区 「備前門橋」跡平面

写 真 図 版



調査区全景（南から）

写真図版 2
北区



調査区全景（北から）



南北方向石列（東から）



南北方向石列（東から）

写真図版 4
北区



東西方向石列（北から）



東西方向石列下部（北から）



東西方向石列裏込め状況（西から）



東西方向石列下部（その2：南から）

写真図版 6
北区



東西方向石列下部（その2：西から）



調査風景（機械掘削）



調査風景（人力掘削）



調査風景（人力掘削）

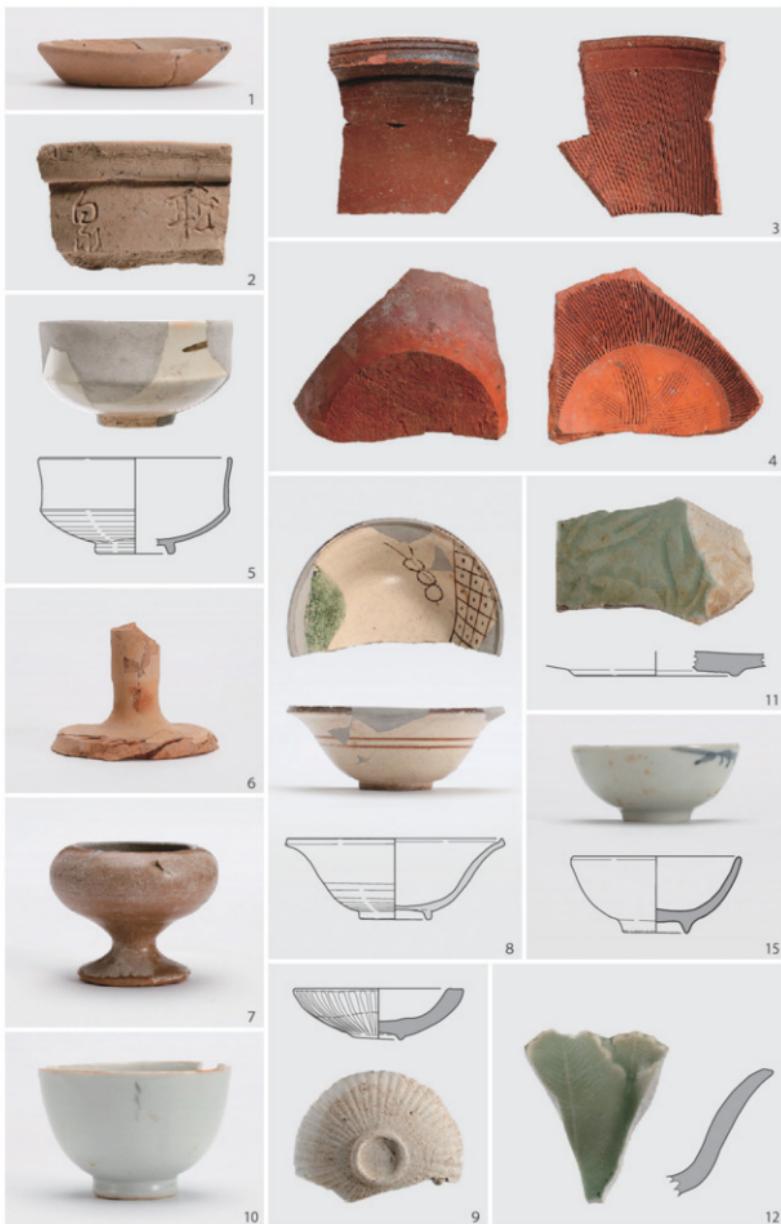
写真図版 8
北区



調査風景（遺構掘削）



調査風景（実測）



北区出土遺物 1

写真図版10
北区



北区出土遺物 2



北区出土遺物 3

写真図版12
北区



S1



S2



M3



M4



M7



M5



M6



M1



M2



M3



M4



M7



M5



M6



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）

写真図版14
南区



調査区南壁（断面）



調査区西壁（全景）



調査区西壁（南側 0m 付近）



調査区西壁（南側 10m 付近）

写真図版16
南区



調査区西壁（南側 15m 付近）



調査区西壁（南側 20m 付近）



「備前門橋」下部構造（全景 北から）※アミカケは近・現代の構造物



「備前門橋」下部構造（全景 北西から）

写真図版18
南区



「備前門橋」下部構造（全景 西から）



「備前門橋」下部構造（全景 南西から）



「備前門橋」下部構造（全景 南西から）



「備前門橋」下部構造（近景 北から）

写真図版20
南区



「備前門橋」下部構造（近景 西から）



「備前門橋」下部構造（近景 南西から）



「備前門橋」下部構造（近景 南西から）



延石 4

写真図版22
南区



延石 3



延石 2



延石 1



礎石 1 見切り石（東から）

写真図版24
南区



基礎石 1 (上が南)



延石・礎石・見切り石・石垣 (西から)



延石4・石垣（西から）



石垣（北から）

写真図版26
南区



石垣（上が西）



石垣（西から）



学識経験者（右：広島大学 三浦教授）指導（平成26年9月5日）



姫路市立船場小学校6年生遺跡見学（平成26年9月19日）

写真図版28
南区



現地説明会（平成 26 年 9 月 20 日）



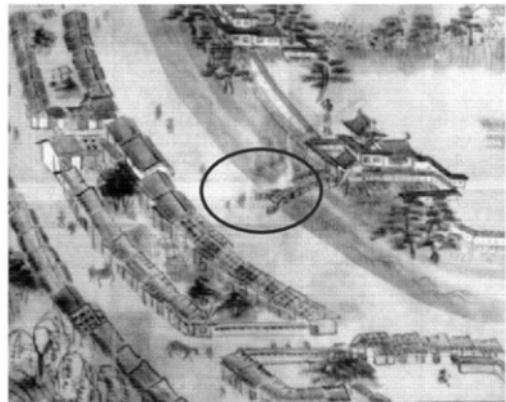
延石の型取り



礎石・見切り石の型取り



型取り模型の設置
(兵庫県中播磨県民センター 姫路土木事務所設置)

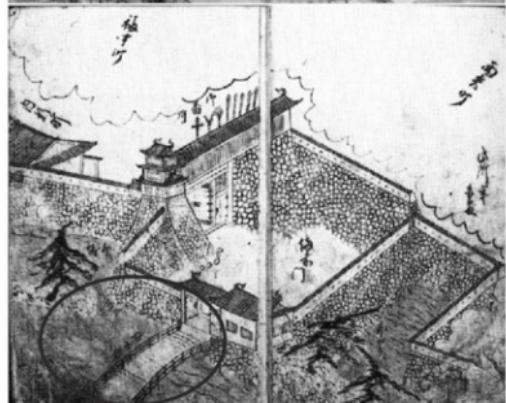


「姫路城図屏風」(越前市・大谷信一氏所蔵)

姫路市立城郭研究室

『姫路城絵図集』平成 26 (2014) 年

※○印は今回の調査個所 (以下同じ)



「大工幾歳姫路城図」

(姫路市立城内図書館所蔵)

姫路市

『姫路市史 第 14 卷 別編 姫路城』

昭和 63 年



「姫路城絵巻」(関西学院大学図書館所蔵)

姫路市

『姫路市史 第 14 卷 別編 姫路城』

昭和 63 年



「天川（あまかわ）橋」移築後看板（姫路市御国野町 御着城跡内）



「天川橋」高欄・欄干（全景）



「天川橋」高欄・欄干（正面）



「天川橋」高欄・欄干（側面）



「天川橋」敷石下部の延石（全景）



「天川橋」敷石下部の延石（正面）

報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第489冊

姫路市

姫路城城下町跡

—（都）船場川線街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成29(2017)年3月28日 発行

編 集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発 行：兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷：株式会社クレアチオ
〒672-8071 兵庫県姫路市飾磨区構4丁目140番地 baseAビル
